令 和 7 年 度 学 校 自 己 評 価 シ ス テ ム シ ー ト （ 県立川越特別支援学校川越たかしな分校 ）w43b

目 指 す 学 校 像	「生徒の可能性を広げ、未来をたくましく生きる力を育成する学校」

重 点 目 標	1　社会自立に向けた豊かな学びを実現する 2　集団生活のルール・マナーを守り、幅広いコミュニケーションの力を身につけ、未来を「生きる力」を育成する 3　地域と連携した支援体制の確立と一人一人を活かした進路を実現させる 4　分校の特性を活かした、社会に開かれた学校づくりを推進し、共生社会につなげる

※　重点目標は３つ以上の設定も可。重点目標に対応した評価項目（年度達成目標を意味する。）は複数設定可。
※　番号欄は重点目標の番号と対応させる。評価項目に対応した「具体的方策、方策の評価指標」を設定。

達成度		
	A	ほぼ達成（８割以上）
	B	概ね達成（６割以上）
	C	変化の兆し（４割以上）
	D	不十分（４割未満）

※学校関係者評価実施日とは、最終回の学校評価懇話会を開催し、学校自己評価を踏まえて評価を受けた日とする。

出席者	学校関係者	１２名
	生徒	５名
	事務局(教職員)	７名

学　校　自　己　評　価								学　校　関　係　者　評　価
年　度　目　標					年度評価（１２月２３日　現在）			実施日　令和８年２月１８日
番号	現状と課題	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況	達成度	次年度への課題と改善策	学校関係者からの意見・要望・評価等
1	生徒個々の実態を踏まえた指導計画を立てるとともに、支援プランを丁寧に検討し、自立活動の取組を高める必要がある。 アクティブラーニングや ICT 活用が求められており、授業内容を工夫し、生徒の学習への意欲を高め必要がある。今後もシラバスを踏まえた指導計画を作成し、個々の課題に応じた授業を行う。	・個に応じた自立活動の目標を設定し、活動を充実させる。 ・シラバスと生徒の実態を踏まえた指導計画を作成し、生徒が意欲的に取り組む授業を実践する。	①個を見据えた課題設定を行い、必要な生徒には、外部指導者を積極的に活用した自立活動を行う。 ②生徒の実態を考慮した指導内容を選択するとともに、意欲的に取り組めるよう工夫した授業づくりと実践を行う。	①生徒個々の実態に応じた自立活動の課題設定をすることができたか。 ②外部指導者の活用や、工夫した授業づくりを行い、活気のある、それぞれの個に応じた支援を行ことができたか。	①必要に応じて個別の自立活動や、グループでの指導の充実を図った。支援方法の工夫や支援内容について検討を継続し実践していく必要がある。②外部講師の活用を広め多様なニーズに応えられるよう、各授業で支援の工夫を行う。	B B	・各学年の実践を共有し、学年間での支援の質を高める。・個別ケースについて継続的に検討し、支援方法の統一と改善を図る。 ・外部講師の活用について家庭へ周知し、家庭と連携を深めながら指導内容を充実させる。	家庭との情報共有や、外部講師との連携は、学校からの働きかけや保護者からの要望など様々だが、外部講師の活用の工夫を行い、家庭への周知も丁寧に行っていけるようにする。
2	行事等、同じ目標に向かう学習をとおして生徒の協力意識を高め、コミュニケーションを円滑にして、ともに取り組む力を、引き続き育成する必要がある。 キャリアデザインの学習を確かなものにし、自身の将来と自立について、生徒自らが考えられるような支援を発展させていく必要がある。	・分校生、初雁高校、本校との同年代との好ましい関わりが持てるよう、取り組みの充実と指導を行う。 ・生徒が自分の将来と自立に意識を向け、必要となる活動に取り組む。	①他校生との取り組みを充実させ、学級活動や行事等において協力が必要な活動を設定する。 ②自分の生活ぶりを意識し、自ら考え振り返ることができるよう、取り組みの目標や成果を明確にした指導や支援を行う。	①協力を踏まえた多様な活動を取り入れることができたか。 ②生徒が自身の将来や必要な力について理解し、自ら取り組もうとすることができたか。	①本校高等部との交流は生徒会役員を中心に取り組むことができた。初雁高校とは行事や販売活動を通して交流したが、活動内容の工夫が今後の課題である。②実習評価表とリンクした作業日誌の先行導入では、生徒が必要な力を意識しながら取り組む姿が見られた。	A B	・初雁高校との交流内容を具体化し、体育祭・文化祭などで協働できる活動を検討する。 ・キャリアデザイン学習や職業では、生徒自身が自分の力を理解し、自ら取り組もうとする活動や指導方法を工夫する。	初雁高校との交流活動について、工夫の希望があるが、初雁高校からの意見や要望を引き出せているのか、今後も模索を継続する。 職業支援では、もっと多くの体験（現場実習）が必要であると考える。また、技術指導など、支援の充実が必要である。
3	近隣の施設等（センター、幼稚園等）への分校の活動の理解啓発と、生徒が地域とふれあえる活動の機会の拡大を図ることが求められる。 また、学校と企業の相互理解をさらに進め、企業とのつながりを深めて、生徒の進路の選択肢を増やしていく必要がある。	・近隣とのつながりを深め、分校への理解と関心をもってもらう。 ・企業と生徒及び保護者の意向を踏まえ、将来長きにわたって勤められる職場、職種を見出す。	①自治会や幼稚園等、学校の様子を伝える取り組みを充実させる。 ②学校を知る機会や、福祉事業所、関係諸機関と連携して、分校の取組を理解してもらうとともに、生徒、保護者向けの進路に関わる講演会を充実させる。	①喫茶活動など、地域の方とのふれあいをとおして、コミュニケーションを図れる機会を持てたか。 ②企業や関係諸機関の理解と、生徒保護者の進路にかかる理解を高め、産業現場等における実習を行うことができたか。	①地域販売活動を年 4 回実施し、自治会との協働活動（庭木の伐採、林の手入れ）も継続した。カフェ来校者も増え地域からの理解は着実に深まっている。②進路講演会を実施し、希望先での実習を進めたが、生徒・保護者の理解を深めるための取組は継続が必要である。	A B	・自治会や地域との連携を引き続き行い、分校全体で地域販売活動を充実させて、分校への理解を深めていく。 ・生徒や保護者の進路への理解が深まるよう、生徒保護者への情報発信や、職員それぞれへの研修など、理解啓発活動を検討する。	進路の観点では、一生を通じてフォローしていく必要がある。地域がどこまで関わっていけるのか、難しい点である。また、フォロー体制をどう継続していくのか、具体的な方策を講じていく必要がある。 企業や地域、公民館など、具体的な連携の要望を出してほしい。共に連携を模索していきたい。
4	生徒の社会自立に向けた豊かな人間性の育成に伴って、教職員は自ら率先垂範し行動で示していく必要がある。生徒、職員のそれぞれが互いに「尊敬と対話」を重視し、風通しがよくて働きやすく、思いやりと思慮に富んだ学校運営を行うことが課題である。	・多様な考えを受け入れ、共生社会の基礎となる豊かな学校教育を実践する。 ・働きやすい職場環境を整える。	①それぞれの特性や多様な考えを共有し理解できるよう、対話や研修を重ねる。 ②ICT の活用や、教材や・資料の保存方法の工夫を行い、職員の負担を軽減する。	①講和や研修、様々な機会をとおして、人権の尊重や障害特性、多様な考え方を受け入れた指導・運営ができたか。 ②教材、資料の活用や保存方法の工夫ができたか。	①多様な考え方について柔軟な支援につなげられるよう教員研修の機会を年 2 回持った。適切な支援に向けて今後も継続して研修を進める。②ICT の新システムや保存方法が急激に変化したため継続して対応する。	B B	・外部講師による研修など模索しながら、教員研修を充実させ、障害特性に応じた支援の充実を図る。 ・ICT におけるシステムの変化に対応できるよう、校内の ICT 整備を丁寧に進めていく必要がある。	学校に ICT を導入したことで、教職員の業務へのメリットとなるよう、校内整備を進めていく。